



聞き書き研究会とは、江戸川区で生活し、江戸川区を愛し、強く逞しく生きた女性の姿を江戸川区女性センターの区民ボランティアが「聞き手」となって編集し、文書として残すための活動です。

「めざせ、生涯現役」 — 看護師、学生、元気でいつまでも —

はぎ わら つ や こ
萩原 ツヤコ
1924年(大正13年)
長崎県南高来郡(現南島原市)
生まれ、江戸川2丁目在住



一生看護師

わたくし、只今88歳。看護師です。
渋谷区広尾にある日赤(日本赤十字社医療センター)に定年まで勤め、退職後はのんびりしようと思っていました。ところが、先輩に「60歳で遊んでいるな」って引張り出されて、小中学校の移動教室や修学旅行などに付き添う仕事を始めたんです。

学校から要請をいただいて20年間、静岡から福島まで各地へ行きました。山登りが好きだったので、子どもたちの先に立って歩きました。おかげさまで体力がついて、ありがたいと思っています。

平成16年からは、全寮制の都立秋川高校でボランティアを2年半やらせていただきました。校長先生から「今、どうしてる」って電話がかかってきたんです。「遊んでいます」って言うと、「それなら来てくれますか」って。「わたくし、もう80歳になりますよ」と申し上げたんですけど、「だから、来て欲しいんだよ」っておっしゃって。

秋川高校は、平成12年の三宅島の噴火で避難して来た小中高生のための避難所になっていました。午後5時から翌朝8時30分まで、3人交代の夜勤で子どもたちをみました。親元から離れてホームシックになったり、熱を出したりする子どもが多かったですね。

これが現役最後の仕事でした。だけど、今も日本赤十字社東京都支部の看護ボランティアに入っているの、命のある限りお役に立ちたいと思っています。

中国大連の日赤

長崎県の農家で生まれ、5男5女の上から7番目でした。尋常高等小学校を卒業しても体調が悪く、手伝いは留守番ぐらい。兄たちは召集され戦争に行き、夫の勤務の関係で中国の大連にいた姉が「来てくれないか」と言うので、これ幸いと17歳の時ひとりで行ったんです。乾燥した空気が良かったらしく、すごく元気になりました。

ちょうど日赤の救護看護婦養成部で募集をしていましたので、なんの気なしに入ったんです。わたくしは、その前の年に肺炎にかかっていて、検査の結果が良くなかったん

です。それで、養成所の部長が「看護婦は大変だから、将来のためには助産婦の方がいいよ」とおっしゃってくださって、助産婦の勉強をしたんです。

昭和19年に卒業して日赤に奉職しましたが、昭和20年8月15日の敗戦からが大変でした。病院はソ連と中国に半分ずつ接収され、看護婦も2つに分けられて、わたくしは中国新政府の看護婦として徴用されたんです。お産で入院していた方は、旦那さんがソ連に連れて行かれたらしいと聞いて半狂乱になっていました。街では着ている物まで剥がされて、略奪ですよ。

病院に日本人がいないと困るから、3年か5年残ってければ、1等客船で帰国させると言われました。けれど、わたくしは「帰りたい、帰りたい」と、昭和22年3月の最後の引き揚げ船に乗せてもらったんです。

ソ連の軍隊と中国の役人が乗船口で人選しているんで、わたくしは顔にススを塗って乗り込みました。怖くて船底にじっとしていましたが、「もうだいじょうぶ」と言われ、遼東半島を見ながら船の先端で、みんなと一緒に胸にたまった思いを大声で叫びました。言葉に表せないほどつらい思いをさせられましたから。



◆大連日赤看護婦時代(中央話者)昭和20年

東京へ来ないか

博多に着くと、体力が落ちて立ってられないくらい疲れが出てきました。でも、2ヶ月過ぎると遊んでもいられないし、博多の小児科で看護婦の募集をしているから来ないかと言われ働き出しました。ところが、5ヶ月ほど経った昭和22年10月、大連の日赤に入院していた顔見知りの男性から突然、「東京に来ないか」と手紙が来たんです。

帰国してからわたくしの友人に住所を聞いたらしいんです。それが夫で、当時わたくしのことを「こんな元気な人間はいない」と思ったようです。コロコロして顔が丸いので、大連では「十五夜お月さま」と言われていましたから。

「東京」と言われ、わたくしも喜んで来てしまったんです。汽車に乗って丸2日、混んで人が窓から出入りし、トイレも行けないんです。着いてみると東京は大変な所でした。何もなくて、食べる物も無い。なんとか我慢して踏みとどまり、12月に結婚し、西一之江(現松江5丁目)に新居を構えました。貧乏でしたが、昭和23年に長男、25年長女、28年次男、29年次女と4人の子どもに恵まれました。

昭和29年、大連日赤時代の同窓会で事務長に再会すると、広尾の日赤の事務長になっていらして、「なんでお前が遊んでいるんだ。あれだけの技術を覚えて来たのに」と、働くよう誘ってくださったんです。

ちょうどそのころ、主人の会社の寮が空いたので江戸川区から江東区に引っ越しました。そしたら、すぐ前に立派な保育園があったんです。子ども4人をぞろぞろ連れて遊んでおりましたら、園長さんらしい方が「ここはお母さんが職業のある方なら優先してお入れしますよ」とおっしゃってくださって。

長男は小学校1年生でしたから、長女と次女の2人だけ10月から保育園に入れたんです。そうしたら会社の守衛さんが「半年ぐらいなら俺がみてやるよ」と、家にいる次男と遊んでくださったので日赤に入ることができたんです。

保育料が2人で5千円くらい、給料も5千円くらいでしたから、3年ぐらいは持ち出しでした。主人が「家にいた方が楽だったね」と言っていましたけれど、仕事が好きだったんです。

そのころの日赤は、よそから来た人に厳しい人ばかりで、「大連から来たのがどのぐらい仕事ができるか」という目で見られたんです。わたくしは気が弱いように見えますが、こんなものに負けるものかと思うんです。「30日がまんすれば3ヶ月、3ヶ月がまんすれば3年、石の上にも3年は座れる」と父によく言われていましたから。

3年もたったら向こうの方から折れてきました。戦争が強くてくれたんですね。最後には「辱め^{はずかし}をうけたらこれを飲め」と青酸カリを渡されましたものね。食うか食われるか、殺すか殺されるかの時代でしたから。

わたくしが日赤に入った昭和30年ころ、小林提樹先生が小児科部長をなさっていました。戦後厚生省にかけ合って「日赤乳児院」を作った方で、生涯をかけて障害児とその家族を守るため尽力し、今でも「重症児の父」と呼ばれています。

その小児科で、わたくしは夜勤のない外来の看護婦をさせていただきます。障害児を持つお母さんのお話を伺っていて、帰りが午後8時、9時になったこともよくありました。そんな時は、保育園に住み込みで働いていた管理人さんが、うちの子を自分の子どもと遊ばせてくれて、本当にみんなに助けられました。

昭和40年に江戸川区江戸川に戻ってきました。都営住宅で引き揚げ者を募集していたので、「食中毒に当たったことも

ないくらいだから、何も当たらない」という気持ちでやったら当たったんですよ。

子どもが寝ているうちに家を出て、今井で4時49分の1番のトローバスに乗るんですけど、亀戸まで2時間かかるんです。総武線で信濃町へ出て、そこから都電で広尾の日赤病院下まで通いました。通勤は大変でしたけれど、主人が子どもたちの朝食を担当してくれましたし、時間があれば夕食も作ってくれたので助かりましたね。

85歳からは人生大学で

82歳で仕事を辞めたら、疲れで体調を崩し入院してしまいました。これからいったいどうなるかと思っていた時に、篠崎文化プラザにある「江戸川総合人生大学」を知ったんです。85歳でも入れると聞いて、平成21年10月に入学しました。介護・福祉学科もありますが看護を長年やったので、「江戸川区を見たいんです」と言って、「江戸川まちづくり学科」に入りました。

西一之江では、子どもたちを乳母車に乗せてよく歩きましたけれど、そのころ原っぱと蓮田で何もなかったんですね。新中川を掘って川のないところに瑞江大橋が架かっていました。60年ぶりに歩いたら、立派に変わったのを見て涙がこぼれました。歩いて見て聞いての2年間は本当に楽しかったです。

夫は23年前に亡くなりました。88歳になったわたくしの挑戦は、これからひとりでどのくらい生きられるかです。死ぬまで人生大学の学生でいたいと思って、平成23年10月からは、「子ども・子育て応援学科」に入りました。

子どもたちは、小さいころ忙しく一緒にいてやる時間が少なかったのに、「僕たちが悪いことをすれば日赤に勤めているおかあさんに迷惑がかかる」と言ってくれました。成長して仕事を始めた長男が、10年間も車でわたくしや妹たちを送り迎えをしてくれました。わたくしはものすごく巡り合わせに恵まれていたと思うんです。感謝して、子どもたちのためにもまだまだ元気でいたいですね。



◆小学生の移動教室の付き添い

